

# 説教「キリスト誕生の告知」

(イザヤ書 11:1-10; ルカ 1:26-38)

2022年12月18日  
日本基督教団仙川教会  
大串肇

「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」(ルカ 1:28)

天使ガブリエルが遣わされたのはナザレという町に住んでいたマリアという少女の元でした。当然ながら、マリアは戸惑いました。そして天使が語った挨拶の言葉をめぐって考え込んだというのです(29節)。なぜ、自分が神に「恵まれた」者であるのか。新共同訳聖書では「恵まれた方」「ケカリトメネー」(κεχαριτωμένη)と訳されています。「(神に)愛された人」とも訳せます。神の恵まれるとは、神に愛されるとはどういうことなのか。あるいはどんなに素晴らしいことなのか。マリアは熟慮しているのです。そこで、天使は次の神のメッセージを伝えました。

「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。」(30-31節)

皆さん、本日の聖書箇所は「受胎告知」と呼ばれる有名な場面です。当時、ナザレという町に住んでいたマリアはヨセフと婚約関係にあったと言われていました。ユダヤの(ラビ的)伝承によれば、12歳~12歳半になりますと、女性は父親の保護下ですが、社会的責任を果たすことが出来る言わば成人と見なされ、婚約も法的には可能であったと言われていました。ですからマリアはたぶんそういう年齢だったと思われまふ。しかし、マリアは恐れないうけにはいきません。まだ結婚もしていないのに、子どもが生まれ、しかもその子どもは「いと高き子の子」すなわち、神の子であるというのです。マリアにとりましては、この天使の御告げはある意味で躓きであったと思います。ふつうならば到底受けられないはずでありまふ。

しかしながら、天使はなぜマリアを恵まれた者であると呼んだのでしょうか。わたしたちの常識で言えば、おめでたいとか、恵まれているというのは財産や富があるとか、高い地位であるとか、有名になることではないでしょうか。ところが、マリアは勿論、そういう境遇でも、やがてそういう境遇に恵まれるというよりは、正反対の人生を歩むことになります。彼女の産むことになる「いと高き方」の子はやがて神を冒瀆したかどで訴えられ、罪人として処刑されることになる運命を負っています。来るべき「**ダビデの王座**」につくはずの王は王座どころか、馬小屋の、飼い葉桶の中で誕生します。この人物は輝かしいものとは一切無縁であり、人から見れば全く無価値に思えるような、貧しく、無力で惨めで、絶望的な運命を負うのです。マリアはこの時、これから自分も負うべき運命をすべて理解して、自己責任で選択したわけではありまふでした。

しかし皆さん、その絶望的な姿は神の子がこの地上に遣わされた目的と深くかかわっています。「主があなたと共におられる」と天使がマリアに語ったように、イエスは勝利と栄光に満ちた英雄でも王でもなく、苦難や試練に遇って苦しんでいる人々に寄り添い、心砕けたすべての人々を救う

ためにそのような卑しい、無力で、絶望的な低き姿をまとわれたのです。しかしそのお方こそ「その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない」(32-33 節)のです。

「どうして、そのようなことがありえましょうか。

わたしは男の人を知りませんのに。」(34 節)

マリアが問題にしたのは「いかに」そのようなことが起こるのか、という現実の、実際上の問題でした。それは当然です。しかし、この神の子の誕生は男女の営みの結果ではなく、およそ人間的な願いや思い、あるいは計画とは無関係に、まったく神のご意志として起こる出来事であり、「聖霊に」よる御業であり、神の目には見えざる御力による出来事であるのです。そのことを天使は告げました。

「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている」。(35-36 節)

この時、マリアは子どものいないザカリアと、親戚であったエリザベト夫婦が、神のご意志によって子どもが授かったことを初めて知ったようです。この人物こそ、洗礼者ヨハネと呼ばれることになる預言者でした。「神にできないことは何一つない。」と最後に天使が語りました。その言葉通り、子どものいない老夫婦に子どもが与えられたのです。こうして無から有を生み出すことのできるのは神だけである。こういう信仰が背後にあるのです。ですから、マリアに与えられる恵み、神の御子が誕生するという出来事も、人間の常識をはるかに超えた聖霊の御業であり、全人類を救済するという更に大いなる神の愛の出来事であること信じることが出来たのです。

こうして最後にマリアはこう答えました。マリアは神の恵みを信じ、こう告白しました。38 節です。

マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」  
そこで、天使は去って行った。(38 節)

「お言葉どおり、この身になりますように」 (let it be with me according to your word. Lukas ) というマリアの言葉は、言わば一つの信仰告白です。マリアこそ、十字架の直下にあっても逃げることなく、イエスの死を見届けた人物であり、復活の証人ともなった人物です。もしマリアが神の恵みや愛が自分の努力や能力で獲得するものであると理解したら、クリスマスの出来事は能力主義、成果主義に陥ってしまいます。

しかし神の恵みはまさに上から下へ、神の聖霊によって与えられる賜物なのです。わたしたちの人生は自分の努力や改善だけではすべて理解して計画通りに突破できないことがいくつもあることに気づかされます。しかし、神はわたしたちを愛していることを信じて生きるとき、わたしたちは大きな支えを得ることが出来るのではないのでしょうか。

「お言葉どおり、この身に成りますように」。このマリアの言葉はイエスが逮捕され十字架で処

刑される直前、ゲッセマネの園で祈られた祈りを思い起こします。ルカ福音書 22 章 42 節です。

「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」

イエスも母マリアと同じように十字架という過酷な運命を神に委ねて突破することができました。この苦難に満ちた十字架の道は復活に通じていたのです。言い換えれば、マリアの信仰告白はこのイエスの従順を指し示しているとは言えないでしょうか。

アドヴェントを迎えたわたしたちは今、神のみ「言葉」、神のみ「心」（「願い」）に静かに心の耳を傾け、祈ることではないでしょうか。そのとき、人生の意味が解明されるとか、この先どうなるのかという予想や予知ではなく、たとえどんなことがあろうとも、あなたは神に愛されている。主はあなたとともにいる。そういう確信が与えられる。希望が与えられるのです。

皆さん、今朝わたしたちはマリアの様に天使の姿を見ることは出来ませんが、あなたは恵まれた者、神から愛されているという天使の声を、聖書を通して聞くことができます。たとえどんなに険しい人生の道にありましても、神の愛と恵を信じられたらどんなに素晴らしいことでしょうか。心の中に大きな支えを得ることができるでしょうか。

どんな時にでも、あなたは神から愛されています。神の恵みによって生かされるのです、そういう希望の根拠がアドヴェント第三主日の朝、わたしたちに豊かに示されているのです。「お言葉どおり、この身になりますように」。ともに祈りいたしましょう。